



シヤルル・バイ著

小林英夫譯

言語活動と生活

過去の發掘（英文）

著者は雋銳なる人生觀、社會觀を持し、それより言語活動を説明してゐる。そして日常茶飯事に現れる言語現象から言語活動一般を支配する大法則を見出さうとしてゐる。

言語を社會生活から説明しようとする試み一所謂言語社會學は言語學に一大進歩を齎したが、

逆に社會學徒は本書の如き言語學書から多大の教示を受けることが出来る。

人間は類を以て集つた。この同氣相求めて集つたものは一つの環境を醸し、そして各々の環境は铭々の慣習的用語法と成句法、又しば／＼風變りな文法形態を有つて有り、言語を作り出す。又文明社

會に残存する原始的心性の痕跡たる迷信、呪術、象徴組織、集團的感情に左右される予盾行爲等は、言語の内に見出されるのである。これらは共に社會、民俗研究のよき手がかりである。

言語學上權威ある文献の一つに數へられてゐる本書は民俗愛好家にとつても興味深い著作である。（昭和十六年三月、岩波文庫、三五〇頁、定價六〇錢）

（陳紹馨）

サード・レオナード・ウーリー

方で述べたものである。

最近この地方に於ける未開時代の遺跡が續々發見され、全くランクであつた南方史前史の一面が次第に明るくなつてくるに及んで、私のやうなアマチュアはどうにかしてこの方面のよいガイド・ブックを読みたいと思つてゐるが、中々よい書物は少い。

その少いこの種の書物の中で、この「過去の發掘」(Digging up the Past by Sir Leonard Wooley) をペリカン・ブックスで讀めることは有難いことである。

著者は有名なフィールド・アーケオロジストで、大英博物館とベンシルベニア大學博物館のメソポ

タミヤへの共同エキスペディションのディレクターとして活躍した人である。ペリカン・ブックスの中には尙この著者の七年に亘るウル發掘の記録 Ur of the Chaldees がをさめられてゐる。

「過去の發掘」は表題のサブ・タイトルに「考古學のロマンス」とあることでもわかるやうに、考古學的研究成果をまとめたものではなく、考古學の實際行つてゐる最新の方法や精神について、若干のロマンスをまじへながら、くだけた敍述のし方で述べたものである。

内容は「序論」「發掘に際して」、「都市遺跡における作業」「墳墓の發掘」「考古學的資料の取扱い方」の五章に分れてゐて、先づ最近數十年間の業績が専ら科學的方法によるアルバイトの結果であることをいひ、次第に實際的方法を説き、發掘に際してのスタッフ、人夫の組織、マテイリアルの取扱い方に至るまで簡明に説明してゐる。著者のフィールドが西南アジアの廣大なる分野であるだけに、飛行機による遺跡の調査といった大がかりな問題が論じられたりするが、注意深い階層的發掘、データを見出すための細心の注意、例へばウルの遺跡のクレイ・タブレットにロイヤル・インスクリプションを見出す方法等、その断片的遺物が過去の文化狀態を再建してゆく過程を興味深く

説いてゐる。もともと英國の BBC からラヂオ放送されたものであるといふが、戰時下の英國界はファイルディング所ではないかも知れない。この書物に述べられた方法をミーフロマンスに過ぎない我々のファイルディングにそのままもつてくることは出来ないにしても、参考になることは多々ある。中等學校や高等學校程度の上代史の参考書として役立つことが多いと思はれる。(アーヴィング・ナッシュ著、日本定價五〇錢九葉)

（舊四三十二葉 日本定價五〇錢九葉）

(國分直一)

黃得時著

水滸傳 第一卷

(池田敏雄)

東京 座右寶刊行會刊

(西六列三三七頁、價一八〇、昭和十五年十二月、

は流石に流暢、少年と云ふよりも、むしろ大人が讀んで興味津々たるものがある。改められた説話は主として怪談が多く、民間信仰と深いつながり。この書物に述べられた方法をミーフロマンスをもつこれらの説話は、本島民衆の間にも廣く流布されてゐるものであり、参考となる點が多い。

(西六列三三七頁、價一八〇、昭和十五年十二月、

はり省がすにおいた方がよかつたのではないだら

うか。水滸傳に出てくる百八人の豪傑は「古往今來を通じて、すべての支那人を代表してゐる」と

パアル・ベックが云つてゐるさうだが、ただにそ

の人物が代表してゐるだけではなく、彼等の行動や、

彼等の行動した社會や世相までが現代の支那にそ

つくりあてはまるやうな氣がする。生じつかな支

那研究書を讀むよりも、此本を讀んだ方が、支那

に對する根本的理解に資することが、よほど大き

いかも知れない。此の意味で水滸傳は決

して、過去の單なる物語ではなく、現代の支那の

物語である。本書の刊行が、現時に於て特に意味

を持ち得るであらうと云ふことは、讀者の單なる

自畫自詡ではないのである。

原文の通確な把握と解釋とに於て、本書は最もならず者高木の出世はなしから始まり、九紋龍進や花和尚魯智深の清輝、林沖の英雄など、本書開幕序も興味深い部分であつて、楊志傳の半巻だけ出た。この巻に收められてゐるところは、後文に新齊記と改む及び「臘異記」等近世支那の小説集から特に少年向として興味深いもの六十数篇を選んで譲出したものである。初版は大正九年に刊行され、その後久しく絶版となつてゐたが、今からして版を改めて再び刊行されたことは、支那に対する世人の關心がたまつてゐる折柄、説話を通して支那の民俗の一端をうかがふことが出来極めて意義深いものがある。

著者は人も知る如く一代の名文家であり、譯文

(後に新齊記と改む及び「臘異記」等近世支那の小説集から特に少年向として興味深いもの六十数篇を選んで譲出したものである。初版は大正九年に刊行され、その後久しく絶版となつてゐたが、今からして版を改めて再び刊行されたことは、支那に対する世人の關心がたまつてゐる折柄、説話を通して支那の民俗の一端をうかがふことが出来極めて意義深いものがある。

著者は人も知る如く一代の名文家であり、譯文

（須藤利一）